

2022年11月

【ママやパパたちへ】11月の育ちのころ ゴールが一律でない素晴らしさ

10月の園からこんにちはでお伝えした、「乳幼児期は、『ゴールが一律に決まっていない』時期」の続きです。それを、「積み木」で例えてみましょう。

「幼稚園」は、ドイツの教育者フレーベルが「神さまが子どもの内に宿してくださった力を引き出す」教育観によって、初めて創ったところです。英語で幼稚園は、「Kindergarten」（子どもたちの庭）。子どもたちがすこやかに育つよう、水や肥料をやり、大切に子どもを育てようと願いが込められています。

そして、フレーベルは、子どもの内的力を引き出す教材として「積み木」を重視しました。

子どもたちの想像力を高め、子どもたちが自由に思い思いに積み木で作ることをフレーベルは大切にしました。

そのフレーベルが始めた幼稚園は、やがて日本にも伝えられ、明治9（1876）年に、東京女子師範学校（現在のお茶の水女子大学）付属幼稚園が日本の最初の幼稚園となりました。

さて、その日本で最初の幼稚園で積み木も導入されたのですが、それは「恩物（おんぶつ）」と呼ばれました。そして、子どもたちは机に向かって、マス目が書かれた紙の上に、先生が言う場所に積み木を置いたのです。

この違いはどうでしょう！同じ積み木でも、その使い方によって、子どもにとっては随分と違うものになってしまったのです。

フレーベルの積み木は、「何を作るかは、子ども自身が決める」ものでした。つまり、『ゴールが一律に決まっていない』活動です。

一方、日本で初めての幼稚園での積み木は、「先生が示した場所に置く」ものとなりました。これは、『決められたゴールに向かって取り組む』活動です。

明治政府が始めた学校教育は「富国強兵」策の一環で、国に役立つ人材を育成するものでした。だから、どうしても『決められたゴールに向かって取り組む』教育になってしまいます。そして、残念ながら令和の時代も今も、日本の公教育は『決められたゴールに向かって取り組む』ことから脱却できないでいるのです（「運動会」も、兵隊さんの能力を競うための行事がルーツです）。

でも、社会が求める人材は、どんな人材でしょう。

それは、「自分でゴールを設定し、取り組む力」「もしゴールが間違っていたら、それを修正できる力」です（もちろん、基礎的な能力は必須ですが）。「乳幼児期は人格形成の基礎」と言われるゆえんがここに 있습니다。そして、だから「あせらなくても大丈夫。子どもたちはそれぞれのゴールに向かって歩んでいますよ」と、お伝えしたいと思います。

12月号では、「体験の大切さ」についてお伝えしたいと考えています。

乳幼児期には、「体験貯金」が大事です。

（園長：飯塚拓也）